

山梨に光を当てる、今、注目のこのひと。

# 山梨のひと

vo.2  
yamanashi  
kono hito

ParuPi特別企画

ライフワークは山梨を元気にすること。  
家族3人で寄席を公演しながら  
甲州街道の宿場を巡るのも一つの夢です



撮影協力: 恵林寺

## 活

動の舞台を東京から故郷・山梨へ。  
芸を通して、山梨の魅力を多くの人に伝える



yamanashi kono hito

めもとだいかぐら  
夫婦太神楽  
鏡味仙三  
「かがみもち」

1975年9月5日、甲府市生まれ。  
國學院大學卒業後、第二期国立劇場太神楽研修生  
となり、研修修了後鏡味仙三郎に入門。2010年に  
結婚し、妻・仙花と夫婦太神楽「かがみもち」を結  
成。趣味は登山。  
かがみもちによるイベントは4月4日の信玄公祭  
り出陣を彩るパレード出演を皮切りに、11日に武  
田神社奉納演芸、12日に太白祭、19日に御幸  
祭に出演。  
問い合わせ、出演依頼等は「オフィスかがみもち」  
電話0553(33)2366

舞い、曲芸、話術、鳴り物の芸で寄席を盛り上げる「太神楽」。昨年3月に東京から妻と息子の3人で塩山に移住した鏡味仙三さんは、その伝統芸を現在に継ぐ太神楽師だ。「移住のきっかけは、子育て環境を考えたこと。マーケットの規模は比べものにならないほど縮小してしまいましたが、コンクリートジャングル(東京)ではなく、野山を駆け巡って遊べる山梨の環境を息子にプレゼントしたかったんです」

甲府一高、國學院大學を卒業後、芸能の世界に飛び込んだ仙三さんは、3年間の辛い国立劇場での研修を経て、鏡味仙三郎師匠の門下に入った。「国立劇場時代の同期は3人いましたが、稽古の厳しさや『本当にこれで飯を食っていけるのか』などの不安から、皆、辞めてしまいました。気が付けば自分一人でした」仙三さんを支えたのは、自分を变えたい、周りに喜びや幸せを与える職に就きたいという情熱。あごに笛を立てる技をなかなか習得できないことには悩んだが、太神楽師としての将来を悲観することは全くなかったという。東京では一日2公演を365日の日々、時代劇ドラマの出演や、国

立演芸場花形演芸大賞(金賞)受賞など活躍の場をどんどん広げていた。訪れた転機は仙花さんとの結婚と息子の誕生。東京での華々しい舞台を自ら手放し、「かがみもち」のコンビ屋号で山梨に凱旋帰郷する。

「蕎麦屋で言えば暖簾分け。師匠に認めて頂いて独立しました。それまでは師匠の恩恵を受けて仕事があったところ、これからは山梨で自分で仕事を取ってこなければならぬ。不安がなかったわけはありませんよ」

甲州おもてなし芸人」として、山梨の良さを県内外に発信する活動を続ける仙三さん。その芸は甲州ワインやぶどうの棚を用いたものなど、山梨文化を取り入れたオリジナルの太神楽となった。

「2020年の東京五輪、27年のリニア開通に向け、山梨には今後国内外から多くの人が流入します。訪れる人をもてなすのはもちろん、自分たちの芸を通じて、県内の人にも故郷の良さを再発見してもらいたい」。おもてなし芸人の使命を明るく受け止める仙三さんは、これからも芸を通して山梨を元気づけ、盛り上げてくれるだろう。